山の精・川の精と
マングローブの森

昔々のお話じゃ。神様が国造りをしようと、土をつかんで「さてさて、どんな国をつくろうかな」と思案されているとき、ぽとぽとと指のすきまからいくつかの土を落としてしまい、「おおしまった」と叫ばれたそうじゃ。そこで、その時生まれた島を「おおしま」と名づけられたそうじゃ。

そして、その時いっしょにできた島々を、やがて、天からいただいた美しいところ「天美おおしま」と呼ぶようになり、後に、「奄美大島」と書くようになったということじゃ。

それから、いくつもの時代が過ぎ、この島の森の奥深いところに、いつのころからか、どこからともなく、豊かな美しい自然を守り、いつも危険なことから村人たちを助けてくれる仲むつまじい若武者夫婦が住みつくようになったそうじゃ。

あるときのこと、この仲の良い二人をねたんで意地悪をしようとたくらんでいるものたちがおったそうじゃ。そして、森じゅうに「おれたちは、あの二人がこの森を自分たちのものにしようと話しているのを聞いた。」と、ありもしない、でたらめなうわさを言いふらしてまわったそうじゃ。

そんなとき、森と村人たちのことを心配しながら話し合っている二人の姿が、逆に村人たちの疑いをまねくことになり、いつのまにか村人たちから、こそこそと悪口を囁かれるようになってしまったそうじゃ。

そして、やがて村人たちは、二人をこの森から追い出そうと話し合ったそうじゃ。

しかし、村人の中には、「あの二人は、この森を自分たちのものにしようとするような人

ではない。それは何かの間違いだ。二人のところに行って聞いて見たらどうじゃ。」

と言う人もいたそうじゃが、すっかり森じゅうに広まってしまった悪いうわさを信じきった人たちは、聞きいれようとしなかったそうじゃ。

そこで、二人のことを信じている人たちは、このことを早く二人に知らせようと、他の者に気づかれないように、こっそりと山深い二人のところに行き、ことのしだいを伝えたそうじゃが、ときすでにおそく、追っ手がすぐ近くまでやって来ておったそうじゃ。

どんな理由にしても争いごとをしたくなかった二人は、しかたなく、知らせに来てくれた村人たちと一緒に森を下って行くことにしたそうじゃ。そして、だんだんと住みなれた森をはなれ、川を下って海の方へ向かっていったそうじゃ。それでも追手は、しっこ

く追っかけて来たそうじゃ。とうとう海の近くまで逃れてきた若武者夫婦は、心の底から、「神様!! 私たち二人の命とひきかえに、ここのこの場所に森をつくって、ここにすむ生きとし生きるものたちを守り、末永く親しまれる場所にして下さい」と、お願いしたそうじゃ。すると、不思議なことに、二人の姿は見る見るうちに森になっていったということじゃ。後から追ってきた村人や、二人を守ってここまで逃れてきた村人たちは、目の前で二人が一面に広がった川の森になったのを見てびっくりして、「あの二人は神様がつかわした森の守り神だったんだ」と、自分たちの犯したあやまちを深く反省し、争いごとをやめて、この森を大切にしたそうじゃ。

それから後、この森の木を二人がいつも剣を持って、みんなを守ってくれていた姿

をしのんで「男ツル木」・「女ツル木」と呼びようになり、やがて、「男ヒルギ」・「女ヒルギ」と名づけられ、今では、オヒルギ・メヒルギの生い茂るマングローブの森として多くの人たちから親しまれているそうじゃ。

なぜか、この森にはいつまでも仲むつまじく手をつないだ木々が、幸せそうに生き生きと生息しているということじゃ。

その後、二人の魂は山の精・川の精となって、この島の穣さと、そこに住む生きとし生きるものたちの命を育み守り続けているということじゃ。

創作者　きがき　寛

問合せ　０８０８８３８１３３８４